

るとともに、心からお喜びを申し上げたいと考えている。

朝中五年の生活は校長としてではなく、諸先生方と同様、全身全霊をもって、生徒指導に体当りをしてきたものである。校長もなければ教諭もない。学級担任もなければ副主任もフリーもない。全教員がすべての子どもに、ひとりひとりの子どもに総力をあげて体当りをしてきたというのが適当な表現だろうと思う。

その五年の実践の一コマをここに記してみたい。

5 朝中五年——子ども像をもとめて

朝倉中学校五年の歩みのなかで、私たち二〇数名の教師は、教師としての教える権利と教えることの願いと、子どもの成長と発展の願いとを、どのようにして確立するために努力したか、その一側面を「朝倉中学校同和教育序説」としてのべてみたい。

何より、「生徒を知る」ことを大切に考えた——われわれ教師は、生徒について知らな過ぎるのではないか、という反省が強く打ち出された。

私たちは、P・T・A懇談会や家庭訪問などの際に、父母に対して「もっとお子さんを知り理解してあげなければ」というし、同僚間でも、父母や地域社会やおとなの子どもも理解の低さについて論議する。ところで、はたしてわれわれ教師が、教育専門家としてどれだけ子どもを知り理解しているだろうか。正しい子ども理解の上でどれだけ正しい指導がなされているかという疑問につき当る。

それは指導の過程で、私たちの考えている子どもと具体的ななまの子どもとの間には、大き

な開きがあるという事実がぶつかり、教育方法の妥当性を欠くことがしばしばあることに気付いたからである。

子どもの生活条件を知るよう努めた——子どもの理解の味として、子どもの考え方や行動の基盤は何かを考えた。その結果、子どもの家庭や地域のもつ歴史性・経済性・社会性・文化性・学校の施設や設備の問題を考えなければならぬ。われわれは、クラスの子どもを同一次元でとらえ、それに画一的な教育内容を注ぎ込もうとしてきた。例えば、その土地が酸性土壌であるのがアルカリ性であろうが、おかまいなしに酸性に弱いホーレン草の種をまくという愚かさをくり返してきたのではないか。ことばや理論の上ではわかりきったことではあるが、実際にはこの愚かさから抜け出ることができなかった。

個々の子どもについて、その生活条件を歴史的・経済的・社会的・文化的側面から具体的に明らかにすることが大切で、とくに部落問題を手がけるような場合、部落のおかれた歴史過程、つまり部落差別を具体的に把握しないでは、子どもの未来像を設定し解放に役立つ教育を確立することは困難であろう。

子どもひとりひとりがその家の伝統と歴史の中で占める位置を明らかにし、果たすべき役割を果たすとともに、所属する地域社会における使命を自覚し、その発展のため果す筋道を具体的に指導することが正しい教育のあり方であると考えた。

そのために私たち教師は、子どもの家庭環境・生活条件を具体的に知ること、併せて部落の歴史を知ることや、地域全体の職業や収入など経済生活についてできるだけ具体的に知ることが努力した。その中でも、とくに貧しい、苦しい、問題の多いと思われる家庭については、特